2015 年 6 月 18 日放送

「第 66 回日本皮膚科学会西部支部学術大会 ①　大会を終えて」

香川大学　皮膚科
教授　窪田　泰夫

はじめに

2014 年 11 月 8～9 日の２日間、香川県高松市のアルファあなぶきホールにて、第 66 回日本皮膚科学会西部支部学術大会を主催いたしました。同学会の香川での開催は、1992 年以来 22 年ぶりとなります。会期中には 904 名のご参加と、一般演題 152 題、講演８題、シンポジウム 16 題、CPC４題、スポンサードセミナーとスポンサードシンポジウム 26 題を頂戴し、学会を無事に終了することができました。ご参加を賜りました会員の方々、ご協賛を戴きました企業や団体、日本皮膚科学会香川地方会および同門の先生方に厚く御礼申し上げます。

当学会では、2014 年が四国 88 箇所霊場開創 1200 年目にあたることにちなみ、会の基本テーマを「同行二人の皮膚科」としました。「同行二人」とは、四国 88 カ所霊場を巡るお遍路さんの菅笠に書かれている言葉で、遍路をする巡礼者の脇には、常に開祖である弘法大師・空海が寄り添っている、という意味です。弘法大師・空海の生誕の地こそ讃岐の国、現在の香川県です。我々はこの言葉に、皮膚科における「患者と医師」「研究と臨床」「知識と経験」など様々な関係を重ね合わせ、互いにともに寄り添い、歩んでいこうとの意味

を込めました。学会プログラムの随所に、「同行二人」の思いが反映されるように企画しました。なお学会シンボルマークは、香川県の県花・県木であるオリーブをモチーフに当教室で作成しました。

講演内容

招聘講演は「糖鎖科学の進歩と疾患診断への応用」と題して産業技術総合研究所の成松久先生にお願いしました。産総研糖鎖センターでは、過去 13 年にわたり、糖鎖研究に必須な基盤技術が研究開発されており、近年、これらの糖鎖には疾患バイオマーカーとしての可能性が注目されています。本講演では、卵巣癌や胆管癌マーカー、そして肝線維化マーカーとして承認、市販された糖鎖マーカー（WFA-M2BP）の臨床上の有用性などについてご講演を賜りました。

特別講演では「免疫老化と高齢者敗血症―その病態と治療への免疫学的アプローチ」と題して東海大学外科学系救命救急医学の井上茂亮先生にお願いしました。高齢者では軽度の侵襲から局所感染が全身性に波及する敗血症に陥り、重症化しやすいことが知られています。本講演では、加齢に伴う免疫系機能変化である「老化免疫」の病態について、また今後増加しうる高齢者敗血症の治療を見据えた免疫学的アプローチを紹介していただきました。後述するシンポジウムの「後期高齢者の皮膚がん診療」や「基礎老化研究」と合わせて、老化における基礎と臨床の同行二人を目指した企画でした。

教育講演では自然免疫受容体による樹状細胞活性化メカニズムの解析と題して香川大学免疫学の星野克明先生が講演されました。我々の体に病原体が侵入した際、最初に働くのは自然免疫です。その受容体である Toll-like receptor を発現する形質細胞様樹状細胞は TLR を介して活性化すると多量のＩ型 IFN を産生し、SLE や尋常性乾癬などの自己免疫性疾患や皮膚疾患の病態形成に深く関与します。本講演ではこれらの疾患に対する新しい治療戦略を探るための、形質細胞様樹状細胞によるＩ型 IFN 産生誘導メカニズムの研究を紹介して頂きました。

もう一つの教育講演は「血管新生における内皮細胞の受容体シグナルの役割」と題して香川大学自律機能生理学の五十嵐淳介先生にお願いしました。血管新生は創傷治癒、炎症、悪性腫瘍など、皮膚科領領域においても多彩な病態に関与しています。本講演では血管新生の各過程における血管内皮細胞の受容体シグナル分子の役割について概説していただき、スフィンゴシン１リン酸や、新しい核酸類似物質コアクロルなどの低分子化合物による、内皮細胞受容体シグナルを標的とした血管新生の制御とその臨床的応用の可能性についてご講演いただきました。

国際交流講演では「米国医療の光と影、患者権利の視点から」と題して元ハーバード大学医学部の李啓充先生が話されました。アメリカでは、患者の権利が法律で手厚く保護され、患者と医療者を結ぶインフォームド・コンセントのルールが確立しています。一方で健康保険の制約により医療には厳しい制約が課せられています。本講演は長きに渡り米国で活躍

された先生が見てこられた、米国医療の光と影についてお話しいただきました。

学術文化講演は「病みながら生きる存在としての夏目漱石」と題して筑波大学の高橋正雄先生にご講演をお願いしました。歴史的に傑出した人物の生涯を、精神医学および心理学的観点から研究分析し、その活動における疾病の意義を明らかにしようとする学問が病跡学です。今回は、自他共に認める「神経衰弱」を持ちながら、多くの偉大な創作を残した夏目漱石、その漱石の生涯や作品を通じて、病を抱えながら生きる人間の生き方や当事者の思い、そして「病みながら生きるものへの畏敬」についてのご講演でした。ちなみに 2014 年は漱石の代表作「こころ」の出版からちょうど 100 年目に当たりました。

市民公開講座では褥瘡と疥癬という、現在の高齢化社会に密接な話題を取り上げました。

会場風景

シンポジウムは「角化症と水疱症」「後期高齢者の皮膚がん診療」「皮膚科と Information and Communication Technology」「基礎老化研究」の 4 テーマを設け、各分野のエキスパートを招聘しました。

本学会の CPC では事前に学会ホームページで症例提示と組織標本のバーチャルスライドをクイズ形式で公開し回答を広く募集して、学会場での討論に反映させました。

一般演題は、それぞれ口演とポスター発表を行っていただきました。全国から 152 題の素晴らしい内容のご発表を頂戴しました。

ポスター会場

スポンサードセミナーは、「乾癬」「アトピー性皮膚炎」「ざ瘡」などをテーマに、13 件を用意しました。とくに開発のめざましい乾癬の生物学的製剤治療に関するセミナーが多く、参加者も会場の選択を迷われたことと思います。２つのスポンサードシンポジウムでは、「皮膚科医主導の痤瘡治療」そして、日本乾癬学会と共同企画した「乾癬教育プログラム」を開催いたしました。

お接待の心―「おもてなし」のルーツ

さて、本学会運営では、「お接待の心」を基本にしました。お接待とは、四国の地元の人々が、四国を巡礼するお遍路さんを歓待する風習で、１昨年の東京オリンピック招致で一躍有

名になった言葉、「おもてなし」のルーツです。全国から本学会に足を運んでくださった方々に、いかにご満足いただけるかに心を砕き、準備を進めました。例えば、学会の情報発信には twitter を使い、学会準備の進捗状況や会場周辺の観光情報、香川県の名産紹介などをつぶやきました。また、会期 3 週間前からは全国の皮膚科主要研修施設にメールマガジンを発送し、プログラムが直接発送されない先生方にもアピールしました。また学会のプログラムは全ページ電子化しました。通常の PDF 版に加え、スマートフォンやタブレット用に特化した、ファイルメーカー版も作成し無料公開しました。

「うどん県、香川」で開催する学会ということで、地元のうどん屋さんにご協力いただき、学会場に「うどん屋台」を設置し、本場の讃岐うどんをふるまいました。さらに香川大学が世界で初めて大量生産に成功した希少糖を使ったお菓子やうどん県グッズなどの販売を行い香川の魅力を広くアピールしました。懇親会ではワインエキスパートの資格を持つ当教室員が本学会のために厳選したワインの銘品を楽しめるコーナーも人気を博しました。

学会場に「うどん屋台」を設置

そのほか、会期を通じて教室員が撮影した数百枚に及ぶスナップ写真は、撮影当日からオンラインサービスで来場者に限定公開し、無料ダウンロードしていただくことにしました。参加者の方からは、すぐに希望の写真を手に入れることができると、大変好評でした。　皆様のおかげで、本学会も盛会のうちに終了いたしました。参加されました全ての方々に、香川県の楽しい思い出と、香川大学皮膚科学教室の団結力を感じていただけたのであれば幸いです。

図説

図１　学会シンボルマーク　デザインは森上徹也事務局長（香川大学学内講師）
図２　会長挨拶　学会テーマ「同行二人の皮膚科」
図３　活発な討論が行われた一般演題会場
図４　利便性を考え１区画にまとめたポスター会場
図５　大好評だった会場内のうどん屋台